



7月号

ひだまり

今月のエッセー

初めての帰りに

つい先日、生まれて初めて歌舞伎を観てきました。以前から一度観てみたいと思っ
てはいたものの、腰の重たい私は長らく行動に移していませんでした。でも最近、身近に歌舞伎ファンがいることを知り、お願いしたところ快くチケットを取ってもらえたのです。

デビュー当日（もちろん観客として）、歌舞伎座へ向かう電車の中で、観劇の知識を調べて来るべきではなかったかと少し心配になりました。しかし、それは要らぬ不安で、いざ幕が開くとストーリーもよく解って面白く、その都度毎、舞台全体が止まって役者が見栄を切り、一枚の絵

の様に極まったその姿を惜しげもなく観客に見せつける様は本当に恰好よく、初心者の私もすっかり魅了されてしまいました。また衣装の美しさも特筆もので、特に猿之助が纏っていた紅い着物と緑の帯のその色がゾツとするほど鮮やかで美しく、またまた感動させられたのでした。そんな私も間もなく三十。否、「まだまだ三十」かもしれません。でも世間ではいい大人。一応それだけ生きてきたのだから、この身はそれなりに色々なものを見、聴き、味わい、体験してきたはず。そして、その蓄積は私独自の貴重なもの。でもその蓄積のせいか、ここ最近は二十代初めと比べて、痺れる程に感動するところがめっきり減ってしまった気がするのです。それが大人になるという事なのでしょう。でも、そうだとすれば何だか淋しい気がします。

目や耳に飛び込んで来るものに逐一心奪われていたあの頃は、もう戻って来ません。しかし、そんないい大人も純な興味に身を任せ、この先もずっと感動を味わいながら生きていきたい。観劇の帰路、そんな事を思いました。

◆田代浩潤

仏教のことば

「ぜんざい」

今月の仏教のことばは、「ぜんざい」です。

「ぜんざい」とは、主に小豆を砂糖で甘く煮て、その中に餅や白玉団子、栗の甘露煮などを入れた食べ物のこととをいいます。

実は、「ぜんざい」はもともと漢字で善哉（善き哉）と書き、「すばらしい」を意味するサンスクリット語「サードウ」の漢訳です。

インドでは、日常的に用いられていた言葉ですが、仏教では特にお釈迦様が弟子の言葉に賛成や賞賛の気持ちを表すときに、「それでよい」、「実によい」といった意味で用いら

れておりました。

現在、インドネシアやフィリピンなどの東南アジアにおいて、仏教行事が行われる際、例えば、お経を読み終わった後や説法が終わった後に一斉にこの言葉をお唱えすることがあります。

また、日本で現在のようになされた一説には、とんちで有名な一休さん（一休宗純）が最初に「ぜんざい」を食べたとされ、そのあまりの美味しさに「善哉」と叫び、「善哉之汁」と褒め称えたことが語源であるとされています。

◆田中仁秀



編集後記

まだまだ蒸し暑い日が続いていますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？私はこの蒸し暑さのため、何となく気分が晴れずいます。

七月は一年の折り返し地点です。この半年間を振り返ってみると、毎日忙しいと言いながら、あつという間に半年が経ってしまったように思います。そして、自分は時間を有効に使っていたのだろうか…という疑問が出てきました。

残りの半年はしっかりと計画を立ててもっと有意義なものになるよう努めて行こう。そのように思う今日この頃です。

◆國生徹雄

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



一年度
伊藤正法

『無駄を無くす』

「杓底一残水、流汲千億人」という言葉があります。

「一杓の水でも元の川に流れることによつて、多くの人々が恩恵にあずかる」という意味のこの言葉は、永平寺を開かれた道元禪師が「柄杓で汲んだ水を使われた後、底に残った水を無造作に捨てず、元の川に戻された」という逸話を元に、永平寺七十三代熊澤禪師によつて詩にされ、永平寺入り口にある門柱に刻まれています。

最近何かと、「エコ」とか「省エネ」等をよく耳にしたり目にしたります。そのことで、私は以前このような経験をしました。

東日本大震災から二年の歳月が経ち、梅

雨明けの暑さが本格的に厳しくなってきた頃のことです。

「電力不足が予想されるので、節電して下さい。」そんな内容がテレビやラジオのみならず、町内の街頭スピーカーからも連日放送されていました。

それを聞いた当時の私は、真っ先に電気を一番使うエアコンを止めました。最初の内は、「エコ・省エネ」や「社会貢献」が素晴らしいことだと熱を上げ、それを頑張つてやり通そうと思つていたのです。

しかし、暑さも次第に厳しくなり、とうとう熱中症のような症状が出て来て、このまま続ける事に何の意味があるのだろうかと思ふようになり、結果的に節電自体を止めてしまったのでした。

そのことをお世話になつていたお寺の住職さんに話をしたら、「普段から力み過ぎだから力を抜き、無理をせず、出来る時にやったら良い。」と言われたことを憶えています。

どうも私は、道元禪師の逸話の真意を分かつてなかつたのではないかと思つています。

道元禪師が何を伝えたかつたのだろうかと思つて考えると、限りある資源を節約して使う、ということではなく、あらゆる物を私物化しない、共有されるものだという事ではないかと思つたのです。

普段から当たり前のように使つている「水」なので、どうしても自分の物と錯覚しがちです。川に流れている、今では蛇口をひねれば出てくる「水」は、元々誰の物でもありません。それを使う人間が自分達の都合の良いように「私のもの」としてに過ぎません。

自分が使い終わったら、元あったところに戻す。それは、「私のもの」ではないのですから、お借りしていることになるわけです。

だからこそ「お返しする」。そうすることによつて、次に使う多くの人々に行き渡ります。

まさしく道元禪師は、ほんの少しの残り水に無数のいのちを感じとり、「お返し」されていたと思ふのです。

無理なく自然な流れのままに…。

私のたからもの

『黒帯』



私は中学、高校と部活動で柔道をやっていました。私が柔道を始めたのは、学生時代に柔道をやっていた祖父に勧められたのがきっかけでした。

柔道を始めた頃から、私は黒帯に憧れていました。中学一年生の初めての公式戦。他校の選手の中に黒帯を締めている選手が何人かいました。その選手たちの姿を見て、「強そうだな。カッコいいな。自分も早く黒帯を締められるようになってみたい。」と思つていたのでした。

中学三年生の春、私は昇段審査を受け、初段を取ることが出来ました。その時の嬉しかった思いは今でもはっきりと覚えています。い祖父も

「凄いな。よくやった！」と褒めてくれました。そして、その時に私に買ってくれたのが写真にある黒帯です。

祖父はもう亡くなつてしまいましたが、この黒帯を見るとあの時喜んでくれた祖父の顔が思い出されるのです。

◆ 國生徹雄



ひだまり書房



『星の王子さま、 禅を語る』

著：重松宗育

皆さんは『星の王子さま』という物語をご存知でしょうか？砂漠に不時着した「僕」が出会った男の子は、小さな星から来たという「王子さま」だった。全世界で読み継がれている、サンIIテグジュペリの代表的な作品の一つです。

そんな大ベストセラーが禅を語っている？そう聞くと、なんだかちぐはぐな印象をうけてしまいます。しかし、この本を読みすすめていくと「サンIIテグジュペリは禅僧なのか？」と錯覚してしまうほど、作品のあちらこちらに禅の精神を感じるのでした。

一見、難解で近寄りづらい禅。しかし、実は私たちの日常生活の身近なところにたくさん転がっています。そのことを『星の王子さま』を題材に、楽しく、わかりやすく説いてくれるユニークな禅の入門書です。

◆ 竹村信彦